

「教育」と「人権」～例えばハンセン病問題から考える～

人権同和教育課長 江角 和生

■ハンセン病患者家族の手記から

手元に「思いよ届け！ハンセン病家族訴訟 原告からのメッセージ」という冊子があります。ハンセン病家族訴訟原告団に加わったハンセン病元患者の家族の方々の、裁判での意見陳述やメッセージをまとめたものです。子どもの頃に、両親や兄弟姉妹がハンセン病を発病し隔離された人たち。実に多くの人たちが、異口同音に学校でいじめを受けたと語っておられます。

教員である私は、それでも“先生が力になってくれた”という述懐が欲しくて、一生懸命読み進めました。しかし、ほとんどの述懐には、学校でのいじめにもかかわらず、“先生”という言葉すら出て来ません。どころか、こんなものまで―「寄るな」「さわるな、うつすな」というようないじめに耐えきれなくなって相談した担任の先生の返答です。(ちなみにこの述懐は、30代の方のものです。)

“仕方ないでしょ、本当のことだから。いつまでここにいるの”

■教職員として

この先生を非難することは簡単です。ただ、思うのです。もし、この先生がハンセン病を正しく理解していたらどうだったでしょうか、と。例えば、いじめには正当な理由などないことを知っている今日の教職員は、いじめられている子に対して“仕方ない”とは絶対に言わないでしょう。でも、おそらくこの先生は、ハンセン病を正しく理解しておらず、正当な理由だと思っていた。

ハンセン病とは「らい菌」による感染症です。非常に感染力が弱く、現在では完治できる病気です。しかし、古来“不治の病”とみなされ、日本でも近代以降ハンセン病患者の隔離が政策的に進められました。特に、1953年に新たに制定されたらい予防法は、1940年代に治療法が確立していたにもかかわらず強制隔離政策を継続し、社会のなかにハンセン病に対する偏見や差別が根強く残る原因となりました。ハンセン病問題が「行政による差別」と言われる所以です。

私たち教職員が教え子たちを守るためには、常に正しい知識を求めて学び続け、おかしいことに気づける人権感覚を磨くことが大切である―この事例は、そう教えてくれているような気がします。

■「教育」と「人権」

考えてみると、学校現場が直面する課題の多くは、何らかのかたちで「人権」ということにリンクしていきます。“教職員の人権感覚が今少し働いていれば、このトラブルは防げたのに”そう思わせる事案は少なくありません。ある意味、「人権」はリスクマネジメントを担う一要素と言えるかも知れません。

一方で、実はハンセン病療養所のなかにも学校があり、「教育」が存在していました。ハンセン病患者に対してあらゆる非人道的な扱い＝人権侵害が存在した療養所生活ですが、療養所内の学校で“先生が優しくしてくれた”“厳しかったがしっかり育ててもらった”そうした肯定的な述懐も目にします。そこで行われた教育が、戦前の処遇改善を求める“人権闘争”や戦後の文化活動の礎になっています。「教育」は、「人権」にとって、もっとも大切な要素の一つであるようです。

【「教育」にとって大切な「人権」】、【「人権」にとって大切な「教育」】―どちらの切り口からでも構いません、日々の現実を今一度捉えなおしてみる、というのはいかがでしょう？

令和元年度島根県学力調査の結果分析

昨年12月10日に実施した島根県学力調査の結果について、2月7日までに県内5会場で各学校の学力担当の先生方にお出かけいただき、結果説明会を開催しました。

島根県学力調査（以下、県調査と記載）を実施するにあたり、特に大切にしたいことは、4月に実施した全国学力・学習状況調査（以下、全国調査）で明らかとなった子どもたちの強みがさらに向上し、弱みの改善が図られているかを確認することです。

言い換えれば、4月に実施した全国調査は単に小学6年生、中学3年生の結果と捉えず、小学5年まで、あるいは中学2年まで学校全体としてどのように子どもたちを育ててきたのか、子どもたちの学力等を育ててきたのかを確認するためのものであると考えます。そして、その全国調査の結果を各学校で分析し、更なる取組により子どもたちの学力等の向上・改善が見られるかを県調査で把握し、年度末に向け取組の修正を加えながら、課題の解決を年度内に図るために実施しています。

結果概要等は各校へ配付しておりますが、しまねの教育情報WEB（<http://eio-shimane.jp>）、教育指導課WEB（<https://www.pref.shimane.lg.jp/kyoikusido/zenkokugakuryoku.html>）にも掲載しておりますので、ご覧ください。

1 教科に関する調査

（1）教科調査全般

4月の全国学力・学習状況調査の結果、これまでの県学力調査の結果を踏まえ、改善すべき事項を意識しながら授業に取り組んでいただいていると認識しています。さらに子どもたち一人一人に力を付けるために、以下の点にご留意いただきたいと考えます。

- 基礎的な知識・技能が活用できる、あるいは普段の生活で適切に使うことができるように、活用場面を意識した学習を取り入れる。
- 学んだことが生かされるために、1つの課題を多方向から考えたり、話したり聞いたりといった複数の方法で学習を展開する。

（2）各教科で、今年度中に取り組んでいただきたいこと

今年度の県調査結果説明会においては、全国調査の結果分析も踏まえ県調査の作成・分析を担当した指導主事から各教科における結果概要について説明をさせていただきました。以下に各教科、今年度中に取り組んでいただきたいポイントについてまとめましたので、各学校の実態も踏まえ参考にしてください。

【小学校国語】

- 全ての領域において「考えの形成」を大切に言語活動を設定しましょう。
 - ・「書くこと」…調べたことや読み取ったことを整理し、事実と感想、意見とを区別して書く
 - ・「読むこと」…文章構成、資料との照応関係、作品中の人物関係や心情の変化など図示化・キーワード化して整理、自分の言葉で説明したり、考えを交流したりする
- 図鑑や事典など、様々な種類の資料を読む活動を取り入れましょう。
- 漢字の定着について、意味を理解し、文章の中で正しく書けるようにしましょう。

【小学校算数】

- 児童のいろいろな考え方を取り上げ、解釈する活動を取り入れていきましょう。
- 図形をかいたり、切ったり、並べたり、作ったり展開したりするなどの数学的活動を取り入れていきましょう。
- 数量の関係（基準量、比較量、割合）を多様な図で適切に表す活動や、かかれた図から関係を読み取る活動を取り入れていきましょう。
- 児童が自分の考えを説明したり、ノートに記述したりする活動を適宜取り入れるようにしましょう。

【中学校国語】

- 「話すこと」に併せ、「聞くこと」にも重点を置いて話し合い活動を充実させましょう。
- 読み手を意識し、根拠を明確にして自分の考えをわかりやすく伝える文章を書く活動を取り入れましょう。
- 根拠をもとに自分の解釈を説明したり、互いの解釈を交流したりして、「読むこと」における「考えの形成」を図りましょう。
- 日常の読書活動につながる学習展開を工夫しましょう。

【中学校数学】

- 事象の中にある数量やその関係を文字を用いた式を使って一般的に表現したり、新たな関係を見いだしたりする学習場面を取り入れましょう。
- 立体の模型を観察や操作、実験などの活動を重視しましょう。
- 日常生活における問題から関数の関係を見だし、問題解決の方法を式やグラフを用いて説明する課題を取り入れましょう。
- 代表値や相対度数を使うことのよさが実感できるデータを扱う活動を取り入れましょう。

【中学校英語】

- まとまりのある英文を話したり書いたりする活動を行いましょ。
- 領域統合型の言語活動を行いましょ。
- 言語活動を通じて、生徒が思考・判断・表現することによって定着を図りましょ。
- 小学校で学習した語彙や表現なども、言語活動で繰り返し活用し、表現できるように確実に定着を図りましょ。

2 意識に関する調査

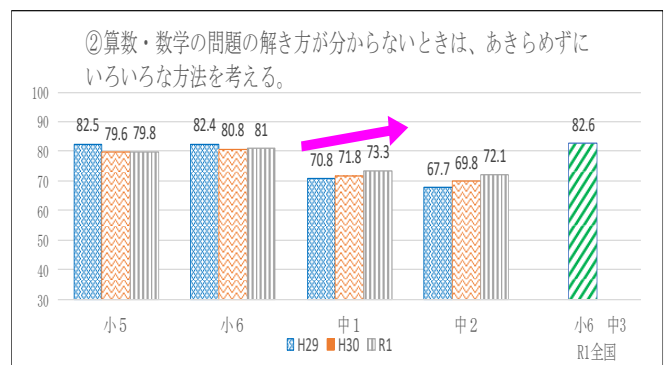
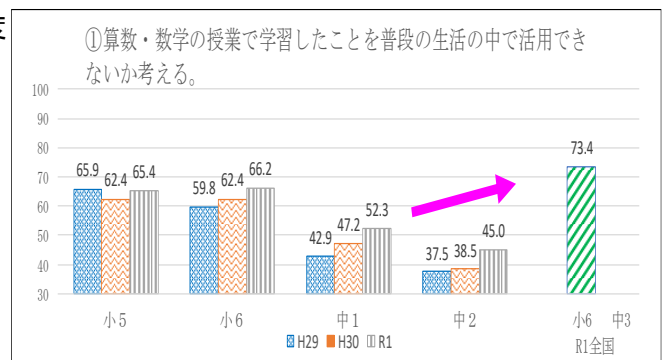
(1) 意識調査を分析するにあたって

意識調査については、①子どもたちの学習に対する関心・意欲・態度がどのような状況であるのか、②子どもたちが日々の授業をどのようにとらえているのか、③より良い学習習慣が築けているのかという3点について分析を加えていきました。

(2) 子どもたちの学習に対する関心・意欲・態度

全国調査では、学校質問紙「各教科等で身に付けたことを、様々な課題の解決に生かすことができるような機会を意識的に設けている」という項目について、肯定的回答をした学校の割合が全国平均より下回っているという状況がありました。子どもたちが学びを楽しみたいと思ひ、学んだことを生かそうとする姿勢を培うためには、我々指導者が普段の学習に意図的な仕掛けを設ける必要があります。

今回の県調査においては、図①②からもわかるように、学習を普段の生活に生かそうとしたり、粘り強く学習に向かったりする子どもたちの姿勢の高まりがみられました。このことから、各学校において授業の改善が進められ、子どもたちの学習に対する関心・意欲・態度も向上していると考えます。

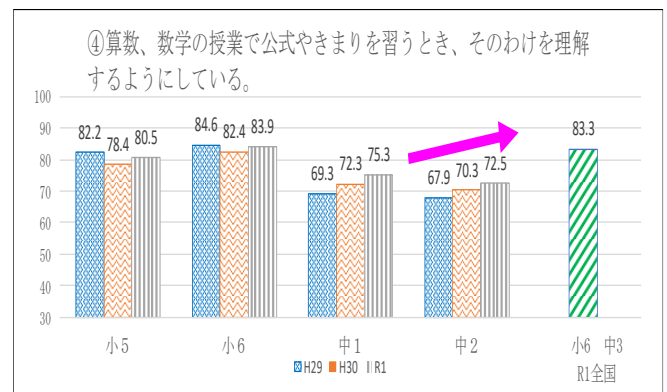
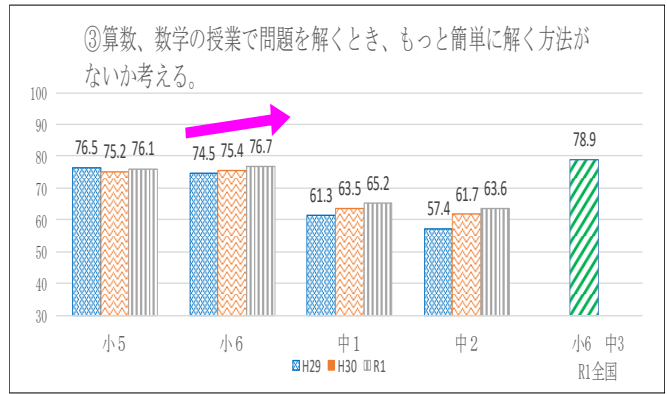


(3) 授業改善の状況

全国調査では、学校質問紙「算数・数学の指導として、発展的な学習の指導に取り組んでいる。」という項目について、肯定的回答をした学校の割合が全国平均より下回っているという状況がありました。先ほども述べましたように、授業で学んだことがほかの学習や日常生活で活用できるものとなるよう授業を改善していく必要があります。

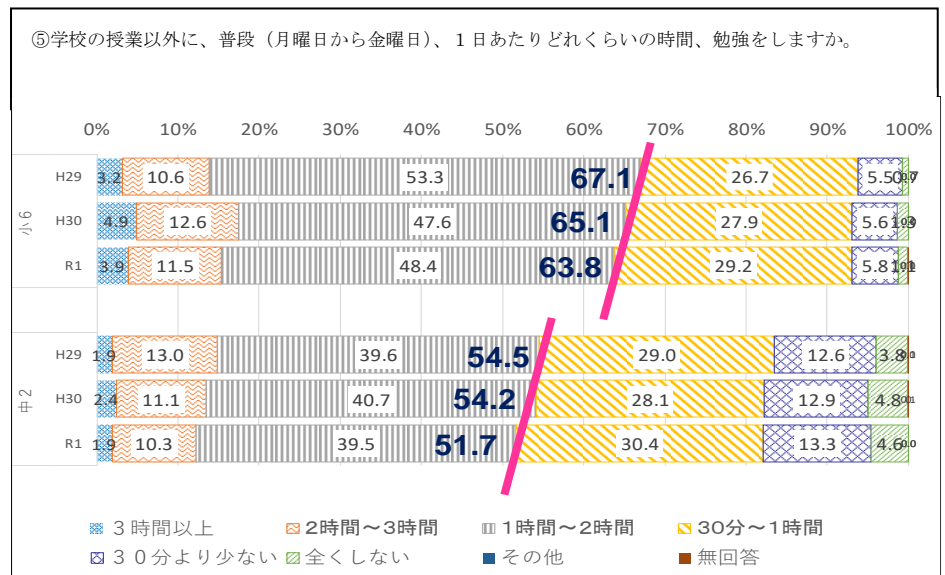
今回の県調査においては、図③④からもわかるように、問題を解くときに、より簡単に解く方法を考えたり、公式の理由を考えたりと、単に覚えればよいという意識ではなく、子どもたちの意識が、効率性や本質の理解へと向かっていることが見てとれます。

一般的に、「主体的・対話的で深い学びによる授業改善」という言葉で表現しますが、これからの学習においては、基礎的な知識・技能が1つの教科に留まらず、日々の生活の中にある課題の解決のために生かすことができる、活用できるものとなるよう深化させていくことが必要であると考えます。併せて、課題を多面的に捉え、解決しようとする学習の取組が重要であると考えます。



(4) 学習習慣

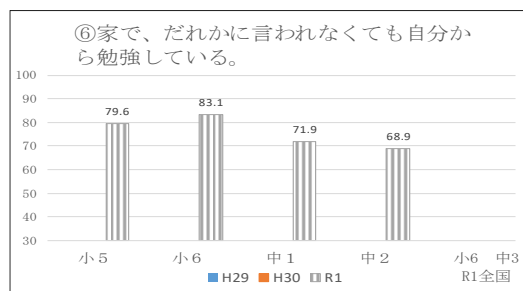
全国調査では、中3を対象とした生徒質問紙「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日あたりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師に教わっている時間も含む）」という項目について、1時間以上、授業時間以外で学習する生徒の割合が全国平均より大きく下回っているという状況がありました。



今回の県調査においては、図⑤からもわかるように、1時間以上、授業時間以外で学習する小6、中2の割合が過去3年間で徐々に減っています。宿題等を増やし、家庭学習時間を単純に増加させることが必要であるとは思っていませんが、学校で学んだことを定着させ、日々の生活の中で活用できるものとするためには、一定の学習時間の確保と学習の質について考えていくことが重要であると考えます。

また、図⑥に示しました通り、今年度、「家で、だれかに言われなくても自分から勉強している。」という質問項目を追加しました。小学5・6年生で8割程度、中学2・3年生で7割程度の子が自分から学習に向かっていることがわかります。

7割から8割を高いとみるのかどうかは様々であると思いますが、一步一步大人に近づき、自立を求められる子どもたちであることを考えれば、自ら計画的に学習に向かう姿勢は全ての子どもたちに付けたい姿勢であると考えます。そして、我々は子どもたちが学びたい課題を提供することが求められているとも言えます。



【家庭学習の役割】

子どもたちの授業以外での学習がなぜ求められるのでしょうか。また、家庭学習はどうして必要なのでしょう。なかなか明確な答えはありませんが、2つの役割があると考えます。

□学習内容の確実な定着

宿題のように、日々の授業で学習したことを身に付けるための復習課題を提示することをイメージしています。宿題をすることで既習内容をしっかりと身に付けたり、活用できる知識・技能としたりすることです。個々の習得状況を把握し、定着が不十分な内容は次の授業で解説を加えたり、個別指導をしたりすることはもちろん、個々への励まし・声掛けもしておられることでしょう。

家庭学習の取り組み方についても、取組時間を区切ったり、例えば「黒板に書くように」というように宿題の生かし方をイメージさせたりすることで、宿題に対する意識を高めることもできるのではと考えます。

□自ら学ぼうとする力の育成

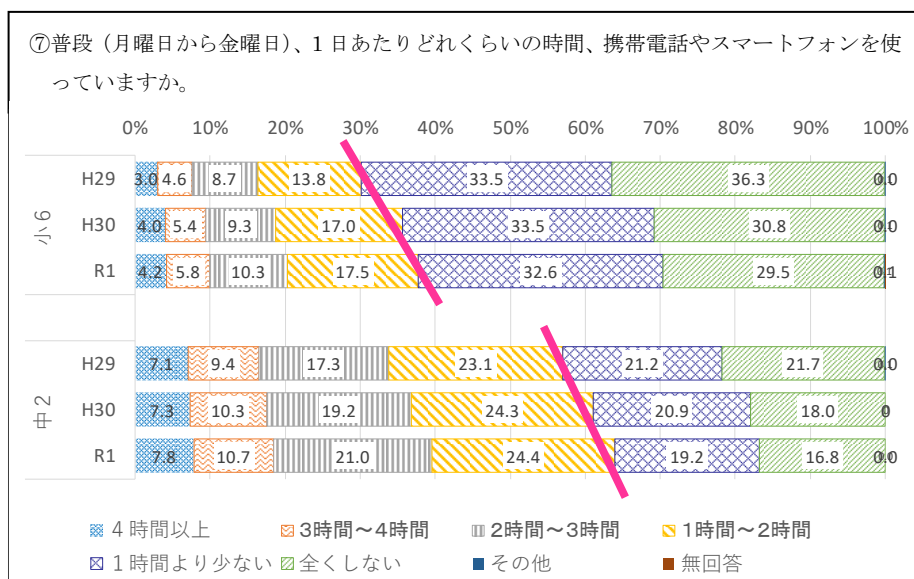
授業とつながる家庭学習、家庭学習とつながる授業とすることです。なかなか言葉で言い表しにくいのですが、次の学習（授業）で生かされる家庭学習の課題設定をイメージしています。

授業の終わりに、その日に学習した内容をつかって解答できる少し高度な課題であったり、身近な生活で生かされていることを意識できたりする課題を提示すると、子どもたちは躍起となってその課題を解こうとすることがあります。全ての時間とは言いませんが、授業者がこのような課題を適宜提示することで、子どもたちの意欲は高まり、自ら学ぼうとする力が育ってくるのではないのでしょうか。

日々共に過ごす子どもたちの状況、学習内容への関心の度合など様々だと思いますが、目の前の子どもたちの実態を踏まえ、意欲を高める課題の提示が必要なことだと考えます。

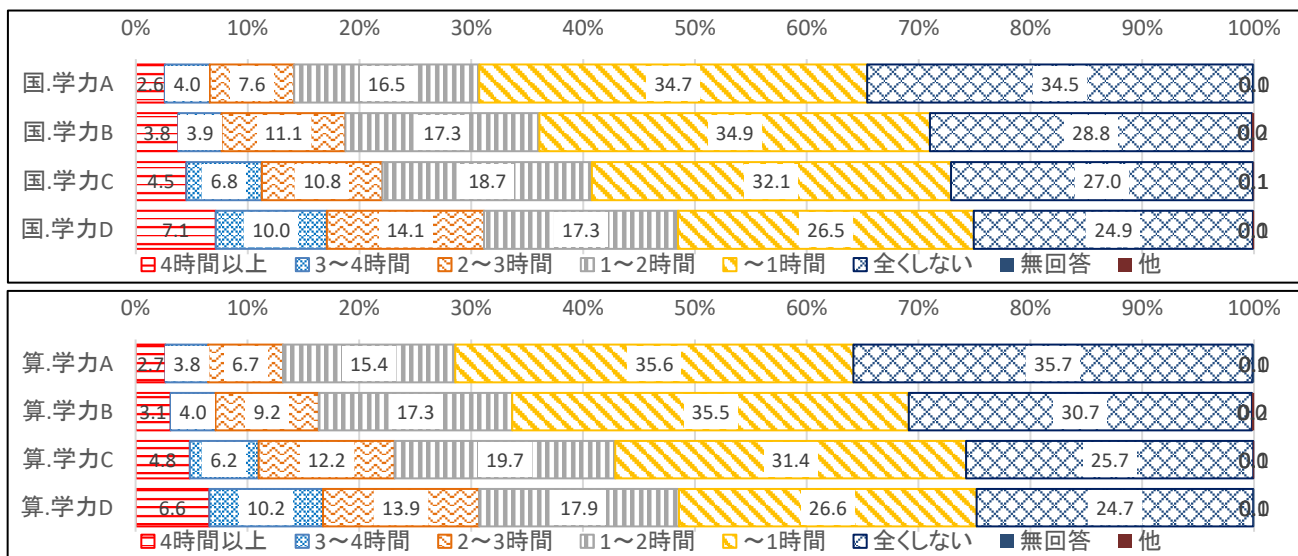
(5) 携帯電話やスマートフォンの活用

今回の県調査においては、図⑦からもわかるように、「普段（月曜日から金曜日）、1日あたりどれくらいの時間、携帯電話やスマートフォンを使っていますか。」という項目において、1時間以上、メディアを活用する小6、中2の割合が過去3年間で徐々に増加しています。ICT機器の発達により学習アプリ等も広く活用されている現在ですので、一概にメディアに接触することが悪いとは思いません。子どもたちの健康管理の面からも、「何のためにメディアを活用するのか」、「どのくらいの時間活用するのか」と言ったルールについては、学校だけでなく地域・家庭と連携して考えていく必要があると考えます。

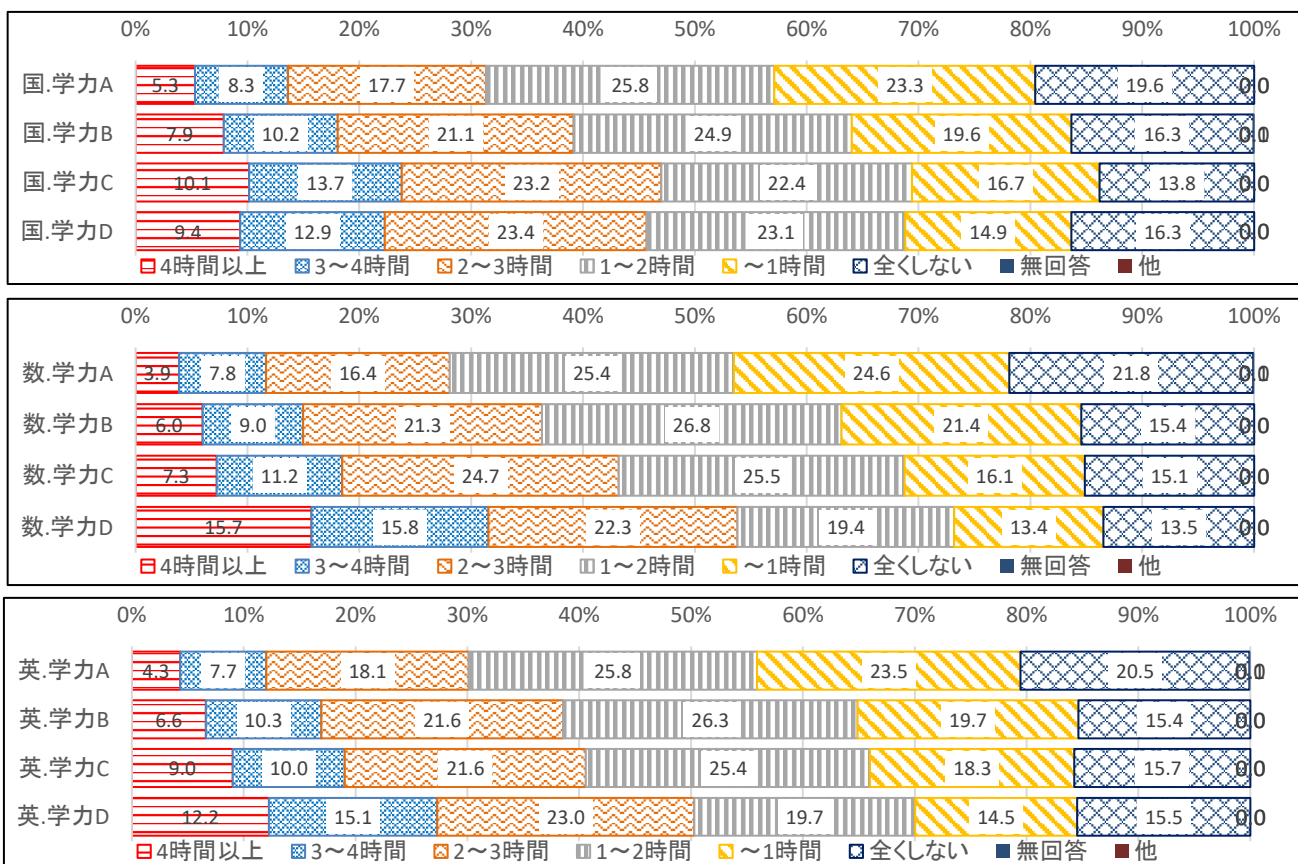


また、図⑧は、子どもたちの正答率から学力層を4段階に分け、それぞれの段階の携帯電話やスマートフォンの使用時間を確認したものです。概ね2時間以上の使用時間においては中2の国語を除き、顕著な差が見られると考えます。

図⑧ 学力層別の携帯電話やスマートフォンの使用時間〔小6〕



図⑧ 学力層別の携帯電話やスマートフォンの使用時間〔中2〕



3 おわりに

島根の子どもたちが、ふるさと島根に愛着と誇りを持ち、夢や希望に向かって挑戦し自らの人生と社会の未来を切り開いていけるよう、「生きる力」をつける必要があります。そのために、県内全ての学校において、今学んでいることと地域や社会とのつながりが実感できる授業を展開し、一つ一つの知識がつながり、「わかった!」「おもしろい!」と子どもたちが感じられる授業に改善していきましょう。